

>>> 小川江筋とその流れ <<<

澤村神社所蔵『小川江筋繪図』パネル展

■会期 平成 26 年 6 月 21 日(土)～11 月 30 日(日)
■会場 いわき総合図書館 5 階 地域資料展示コーナー

『小川江筋繪図』

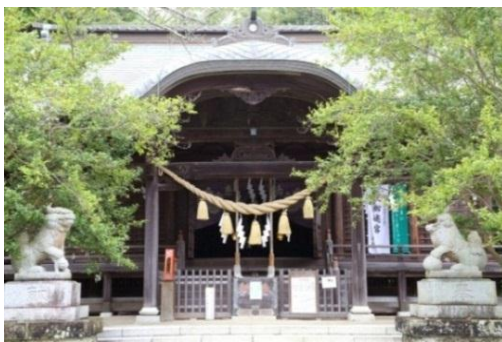
『小川江筋繪図』部分 関場村大堰口



『小川江筋繪図』(おがわえすじえず)は、江戸時代に江筋割頭であったといわれる、いわき市平下神谷の澤村神社宮司・金賀家に伝わる繪図で、小川江筋の維持・管理をするために描かれたものであると伝えられています。

作成年代は不明ですが、江戸時代後期以前には描かれたといわれ、約 30 km に及ぶ小川江筋の流れを、縦 28.5 cm、横(長さ) 14.8m の和紙に彩色が施されて描かれています。

繪図は、取水口の関場村大堰口水門～三島村地蔵堂までは北方角から小川江筋を見るように描かれ、それ以降は逆に、小川江筋を南から見る描法に変化して、終点の上仁井田村まで描かれています。



澤村勤兵衛を祀る澤村神社



社殿には坂本勇氏による勤兵衛と歎順の出会いを描いた絵が掛けられている

◆澤村神社 さわむらじんじゃ

澤村神社は、眼下に小川江筋を見下ろす、いわき市平下神谷字岸前に鎮座しています。

小川江筋開削に尽力した澤村勤兵衛を崇敬した金賀源三郎氏が、勤兵衛の遺徳を顕彰するため、明治 9 年(1876)、自分の所有地を寄附して、当時の磐前県に対して神社創建を出願しました。

同年 2 月、教部省より「社格」の許可があり、翌年には御祭神澤村勤兵衛勝為命を勧請し、澤村神社を建立しました。そして、大正 4 年(1915)には、旧社格郷社に列せられました。

澤村神社の氏子区域は、小川町関場から四倉町上仁井田までの江筋下約 30 km におよびます。その氏子数は約 1,800 戸を数えます。例祭は、4 月 10 日に執行されます。

小川江筋

小川江筋は、小川町関場地内で夏井川を堰き止めて水を取り入れ、小川～平窪～神谷～泉崎～四倉地区を通る、総延長約 30 kmにおよぶ用水路です。そして、四倉町戸田で仁井田川と合流します。途中、水の流れを調節する水門が 17ヶ所、隧道（トンネル）が 5ヶ所設置されています。

現在、小川江筋は、平地区北部の約 900 畝の農地に農業用水を供給しています。農繁期に水をたたえるその姿は、いわきの原風景のひとつになっています。

また、その清流は上水道としても使用され、平浄水場の江筋取水口からは 1 日平均、約 3 万 6 千 m³（平浄水場全体の約 90%）の水が取り入れられています。

浄水された水は、主に、北は久之浜地区、西は小川地区、南は郷ヶ丘地区や豊間地区へ給水され、約 10 万人に利用されています。

同敷地内にある水質管理センターでは、江筋の水や浄水場でできた水を検査しています。検査の種類はすべて合わせると 200 種類におよびます。平成 23 年 10 月からは、新たに「ゲルマニウム半導体検出器」が設置され、放射能物質の検査も行われています。

江戸時代初期に掘られた小川江筋は、350 年以上の時を経て、今もなお、私たちの暮らしに密接につながっています。その流れは、小川江筋開削に命をかけた多くの先人たちの思いを今に伝え、昔と変わらず大地を潤しているようです。

小川江筋は、磐城小川江筋土地改良区が改修を行ないながら、維持・管理して守り伝えています。



小川町関場の取水口。寛永時代、住民が地域の安泰と豊作を祈念して水神を祀ったのがはじまりという大堰神社がある。

撮影 吉田暁欧氏



江筋の水は今も昔と変わらず田畑を潤している。

撮影 吉田暁欧氏



小川江筋取水口(上)と平浄水場(下) 平下平窪
写真提供：いわき市水道局



水質管理センターとゲルマニウム半導体検出器
写真提供：いわき市水道局

※本展示では、金賀元彦氏(澤村神社)、小野佳秀氏、吉田暁欧氏、佐藤勝比古氏、いわき市水道局など多くの関係機関の方々からご協力をいただきました。

小川江筋開削の歴史

当時の磐城平藩領内は、肥沃な土地ながらも水の便が悪く、領内を流れる夏井川は田畑より低いところを流れていました。そのため、その豊かな水の恩恵を受けることができませんでした。

磐城平藩主内藤侯は、家臣の澤村勘兵衛に、干ばつのたびに飲み水にも困る農民を助けるよう命じました。勘兵衛はこれを受け、領内の状況を調べました。その帰途、平泉崎の光明寺で休憩をとりました。そこで、住職の歓順からも、干ばつに苦しむ農民の窮状を聞き、勘兵衛は江筋の開削を決心したと伝えられています。

工事の開始時期については諸説あり、光明寺の歓順が記した『小川江筋由緒書』によれば、慶安4年(1651)2月15日とあります。

その後、『内藤家文書』の公開や『長福寺文書』の発見から、寛永10年(1633)に工事を着手し、同15年(1638)に、小川大堰が完成したことがわかってきました。さらに、同21年(1644)には平窪の新堀工事に着手し、寛文5年(1665)に、小川江筋が完成したようです。これにより、磐城平藩は約2万石の石高が増えました。

小川江筋が現在にいたるまでには、大小さまざまな改修が行われてきました。特に大規模な改修は、昭和33年(1958)～44年(1969)の「県営大規模かんがい排水事業」でした。素堀りの箇所からの漏水や、水路の崩壊など、必要な通水量を確保するのが難しくなったことなどから、コンクリートの水路に改良されました。

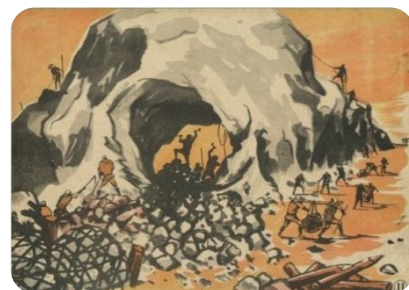
◆決壊する江筋 ー工事の苦労①ー

昼夜を通して行われた工事は、難所も多く過酷な作業の連続でした。現在の小川町下小川字台から丸山の間も、大変な難所でした。

低地に盛土をして通水しようとしたのですが、漏水のため通水できませんでした。二度、三度と試みますが、そのたび決壊してしまいました。

工事がうまくいかず、苦しむ勘兵衛を母は慰め、菰(こも)を敷き、その上に粘土を塗ってみることを助言しました。試してみると、漏水することなく通水でき、勘兵衛は大変喜んだそうです。

『磐城小川江筋沿革史』より



紙芝居『農神 澤村勝為』より

◆蛇塚を築く ー工事の苦労②ー

さらに難所は続きます。

平中平窪字桂進の大巖下では、夏井川の勢いが大変激しく、どのようにしても、川の水を防ぐ堤防を築くことが、できませんでした。再び、勘兵衛は苦悩しました。

ところがある夜、勘兵衛の守り本尊である大日如来が夢枕に現れ、岩山を切り通すようにとのお告げがありました。早速、切通しの工事を開始しました。しかし、多くの蛇が出てきて、掘り進めることができませんでした。

そこで、勘兵衛は蛇塚を築き、守り本尊の大日如来を勧請し、利安寺を建立しました。そして、無事、江筋を通すことができたそうです。

『磐城小川江筋沿革史』より

澤村勘兵衛 さわむらかんべえ 慶長 18 年(1613)～明暦元年(1655)

澤村勘兵衛勝為(直勝とも記す)は、慶長 18 年(1613)、下野国出身の澤村仲の二男として生まれました。兄の甚五左衛門重勝とともに、上総国佐貫城主・内藤政長に仕官し、元和 8 年(1622)の内藤家が磐城平藩への入部のときには、兄とともに城を受取る大任を果たしました。以後、現在のいわき市平字搔槌小路に居を構えました。

藩主の内藤侯は新田開発のため、勘兵衛に領内の干ばつの状況検分を命じました。そこで干ばつに苦しむ農民の窮状を知った勘兵衛は、光明寺の住職・歎順の助言を受け、その救済策として小川江筋開削を藩主に進言したと伝えられています。普請奉行を命ぜられた勘兵衛は、江筋開削の指揮をとり、自己の俸禄も投じて工事に尽力しました。

勘兵衛の最期については、過酷な工事への讒訴説(ざんそせつ)や、検地の不正、許可なく寺を建て寄附をしたなどの諸説がありますが、罷免された後、明暦元年(1655)7 月 14 日、平字大館の西岳寺(現大寶寺)で自刃し、利安寺に葬られたと伝えられています。享年 43。

そして、勘兵衛の一周忌には、農民たちが勘兵衛の霊をなぐさめるために、念仏踊りを奉納しました。これが「ちゃんがら念仏踊り」のはじまりともいわれています。

また、江筋の恩恵を受けた農民たちによって、明治 9 年(1876)、澤村神社が建立されました。

◆光明寺 こうみょうじ

真宗大谷派、陸奥太良山法皇院光明寺は、建仁 2 年(1202)、平泉崎の三谷城内に、城主岩城次郎隆衡により建立されたといわれています。

光明寺第 15 世・歎順の著といわれる『小川江筋由緒書』では、磐城平藩領内の干ばつ状況検分のおり、同寺を訪れた勘兵衛に、歎順は江筋開削を助言し、これにより勘兵衛は江筋開削を決心したとされています。

勘兵衛没後は位牌を安置し御霊を供養し、一周忌には碑を建て、傍らには槇の木を植えたそうです。その槇の木は現在も大切に維持されています。

また、同寺は常磐炭田の開祖・片寄平蔵の墓所としても知られています。

光明寺山門



『小川江筋由緒書』を著したとされる住職歎順の像(光明寺)



利安寺の大日如来堂



澤村勘兵衛の墓(利安寺)



◆利安寺 りあんじ

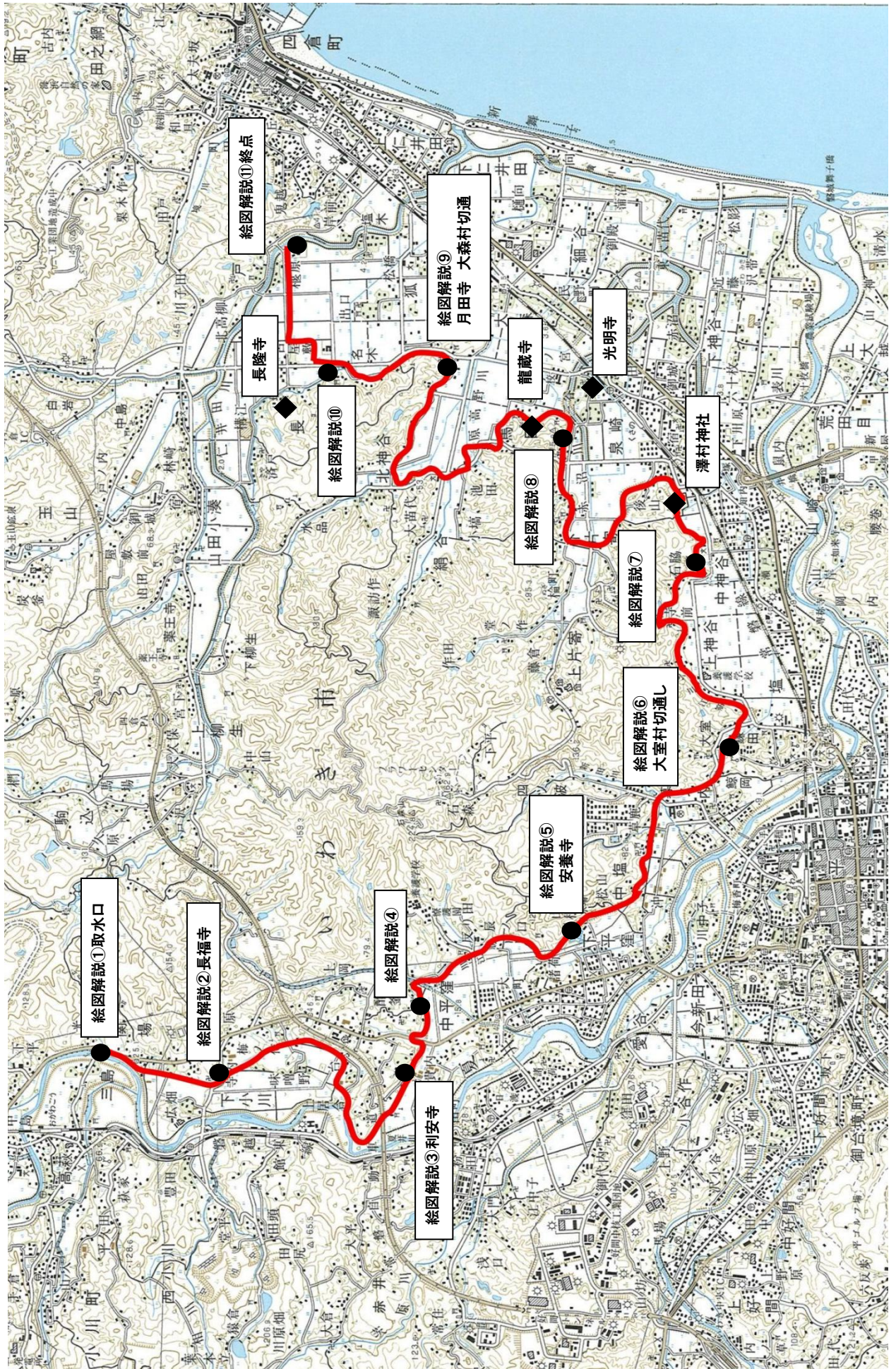
利安寺は、平上平窪字横山に、澤村勘兵衛によって建立されました。

江筋工事で難所といわれた上平窪字横山では、多数の蛇が出てきて工事の邪魔をしました。そこで、勘兵衛は蛇塚を築き、お堂を建立し、勘兵衛の守り本尊である大日如来を勧請しました。これが、現在の利安寺の大日如来堂です。

明暦元年(1655)7 月 14 日、平字大館西岳寺(現大寶寺)で自刃した勘兵衛は、ここ利安寺に葬られ、その墓所は大日如来堂のかたわらに寄りそうようにあります。現在も命日の 7 月 14 日には、江筋を管理する磐城小川江筋土地改良区の人たちによって、墓前祭が行われています。

小川江筋水路図

国土地理院作成 5万分の1地形図



>>> 参考文献 <<<

- ◆ 『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市史編さん委員会 いわき市 昭和 50 年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第9巻 近世資料』 いわき市史編さん委員会いわき市 昭和 47 年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『福島県史 第3巻 近世2』 福島県 福島県 昭和 45 年 (K/210.1-0/フ)
- ◆ 『福島県史 第22巻 人物』 福島県 福島県 昭和 47 年 (K/210.1-0/フ)
- ◆ 『磐城小川江筋沿革史』 磐城小川江筋土地改良区 昭和 59 年 (K/614/イ)
- ◆ 『小川江 文化財調査報告 (一)』 柳沼徳実 平市教育委員会 昭和 38 年 (K/210.5-1/オ)
- ◆ 『生誕 400 年 稼穡の神 澤村勘兵衛勝為』 磐城小川江筋土地改良区 平成 25 年 (K/614/イ)
- ◆ 『概説 平市史』 平市史編集委員会 平市 昭和 34 年 (K/210.1-1/タ)
- ◆ 『磐城平藩政史』 鈴木光四郎 磐城平藩政史刊行会 昭和 45 年 (K/322/ス)
- ◆ 『磐城誌料叢書 全冊』 諸根樟一 平読書クラブ 昭和 62 年 (K/210.0-1/イ)
- ◆ 『いわきの人物誌 (上)』 いわき地域学会 いわき市 平成 4 年 (K/281/イ)
- ◆ 『図説 いわきの歴史』 郷土出版社 平成 11 年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわきふるさと大百科』 郷土出版社 平成 19 年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『神社誌』 いわき市神社総代会第三方部会 昭和 54 年 (K/175/イ)
- ◆ 『いわきのお宮とお祭り』 『いわきのお宮とお祭り』 刊行会 平成 21 年 (K/175/イ)
- ◆ 『いわきの寺』 いわきの寺刊行会 昭和 56 年 (K/185/イ)
- ◆ 『澤村勘兵衛勝為』 大楽正雄 大楽正雄 昭和 28 年 (K/289/サ)
- ◆ 『血流記 沢村勘兵衛伝』 新妻久郎 纂修堂 昭和 58 年 (K/289/サ)
- ◆ 『ぢゃんがらの国 (いわき叢書 1)』 夏井芳徳 歴史春秋社 平成 24 年 (K/386/ナ)
- ◆ 『いわき人 (ビット) Vol.5』 いわき未来づくりセンター 平成 17 年 (K/051/イ)
- ◆ 『いわき市水道史』 いわき市水道史編さん委員会 いわき市水道局 昭和 58 年 (K/518/イ)
- ◆ 「すいどういわき」 いわき市水道局(いわき資料 まち情報コーナー)
- ◆ 『まちの偉人をしらべよう 郷土の調べ方事典 6』 ポプラ社 平成 4 年 (児童/280/マ)
- ◆ 『社会科の散歩道』 いわき社会科地域教材研究会 昭和 61 年 (AL/375/シ)